

夜霧よ今夜も有難う

2005(平成17)年9月23日鑑賞(毎日新聞主催名作鑑賞会・毎日新聞ビルオーバルホール)

★★★★



監督・脚本＝江崎実生／出演＝石原裕次郎／浅丘ルリ子／二谷英明／佐野浅夫／高品格／郷鏝治／太田雅子（日活配給／1967年日本映画／93分）

……毎日新聞からもらったチケットで、毎月一度やっているという、昔の名作映画観賞会にはじめて参加したが、雰囲気はまるで老人会……？ 1967年の名作は今観ても色あせることなく、輝いている……と絶賛するほどではないものの、「あの名曲」と「ハマのまち」のマッチングはすばらしく、情緒タップリ……。そのうえ、ヒーローとヒロイン2人の間に登場する、東南アジアの革命指導者という構想もビッグスケールで大胆だから、物語性も十分。18歳の青春時代にタイムスリップした後、意気揚々と会場を後にしたが……？ 外はたちまち現実の世界……？

カッコいい冒頭のドラマ……

映画冒頭の舞台は神戸。外国航路から帰って来た相良徹（石原裕次郎）は、早速恋人の北沢秋子（浅丘ルリ子）に電話をかけ、「これからすぐに教会に来るように」と……。そしてさらに、驚き、一瞬声が出なくなる秋子に対して、「これから結婚式だ。何も準備しなくていいからそのまま」と……。

携帯電話でないところに時代を感じるものの、何ともニクい演出だが、その直後、事態は急変……？ それはじっくりと映画を観てもらおうこととするが、この映画のその後のメインの舞台は、神戸と同じ港町の横浜。

神戸と横浜

今私の手元に週刊『司馬遼太郎 街道をゆく』No.36（2005年10月2日号）「横浜散歩」がある。そのサブタイトルに「横浜開港の光と影」とあるが、その中に

ある「紆余曲折に満ちた貿易港・横浜の発展」(26頁)には、後半「“後進地”神戸が横浜を凌駕」という見出しで横浜と神戸との対比があり興味深い。

この映画はもちろん1967年当時の港町横浜だが、2005年の今、横浜は港町としては同じであっても、巨大都市「ミナト未来横浜」に変容している。他方神戸は、1995年1月17日の阪神大震災から10年余を経て、今やっとそのつめ跡が消え、復興が定着しはじめた状態。

そんな、1967年から38年後の現在の神戸と横浜のまちを考えながらこの映画を観れば、大いに興味が深まるのでは……？

カッコいいマドロスものが大はやり……

石原裕次郎登場後の日活は、裕次郎と旭の二枚看板の他、和製ジェームズ・ディーンと言われた赤木圭一郎などの若手が次々と登場し、まさに日活の黄金時代……。そして、松竹の女優路線と正反対の男性アクション路線を売りものとしていた日活では、あの時代「マドロスもの」が大はやりとなった。

背が高く足の長い裕次郎や旭たちは、もちろんどんなスタイルでも似合うのだが、とりわけ船長さんスタイルはカッコいいもの。そういえば裕次郎・旭の後の日活を背負い、長い間テレビで活躍中の息の長い俳優、高橋英樹も、土曜ワイド劇場の『船長』シリーズでは同様にカッコいい船長さん姿を……。

日本のオードリー・ヘップバーンは……？

若き日のオードリー・ヘップバーンが最も輝いていた映画は、『麗しのサブリナ』(54年)と『昼下りの情事』(57年)。もちろん最高の名作である『ローマの休日』(53年)は別格。60年代の『ティファニーで朝食を』(61年)や『シャレード』(63年)などもよかったが、私の見立てでは50年代のこの2本が抜群！しかして、この最高の時代のオードリー・ヘップバーンと並ぶことができる日本の女優はといえば、それは、あの時代の(決して今の時代ではない!)浅丘ルリ子をおいて他にいない！もちろん、日本にもあの時代に美人女優は数々いたが、オードリー・ヘップバーンのかわいさと可憐な美しさに対抗できるのは浅丘ルリ子ただ1人……？

相良の今の仕事は？ そして今の心境は？

恋人秋子を失う4年前までの相良は、海をこよなく愛する外国航路の船員として夢をいっぱいにかけていた人物。そんな彼が仕事上の夢とは別に持っていた家庭上の夢は、「男3人、女2人」の子供を持ち、愛する秋子とともに生活すること。しかし彼の今の生活は？

それは、横浜のナイトクラブ「スカーレット」でのマスター職。もっとも彼はそのオモテの顔の反面、昔とったキネづかを活用して(?)、困った人たちのために海外への「逃がし屋」をやっているらしい……？ 1960年代後半の1ドル360円という時代、そして今ほど海外旅行が自由でなかった時代における「逃がし屋」とは一体どんな仕事……？

他方、当然女にはモテモテの彼が、今も独身でいるのはなぜ……？ そういう素朴な疑問をもつことが、この映画を楽しむためのコツかも……？

ちょっと珍しい第3の男……？

二谷英明は裕次郎登場以前は主役を張っていたが、裕次郎登場後は一歩後退(?)し、ストーリーによっては敵役に回ることも……。しかしこの映画では、彼は準主役として、ヒーローとヒロインの間に立つ「第3の男」を演じる、うまく演じている。

彼の名はクエン。東南アジアの革命指導者だ。日本で非合法的な水面下の活動を続けていたが、祖国で革命が起こった今、どんな危険を冒しても日本から祖国へ帰らなければならない。そんな使命感に燃え、ヤミ渡航の手伝いをしているという相良を頼ってきたというわけだ。

口髭をはやし、サングラスをかけたお忍び風のスタイルがよく似合ううえ、妻や同志たちにやさしく、しかし他方では「これは戦争なんだ」と冷静(冷酷?)に自己の任務を果たそうとしているクエンの姿に、二谷ファンはしびれるはず……。

日活映画にはボクシングがつきもの……？

石原裕次郎を一躍有名にした映画は、そのデビュー作『太陽の季節』（56年）だが、既に一流となっていた先輩女優である北原三枝をオトし、結婚することになった作品が、それに続く『狂った果実』（56年）。そして、裕次郎が歌うあの歌とともに大ヒットし、日活映画にボクシングのカッコ良さを印象づけたのが『嵐を呼ぶ男』（57年）。

さる9月17日から公開され、今年のアカデミー賞有力候補とされている『シンデレラマン』（05年）や昨年のオスカー作品である『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）、そしてかつての『ロッキー』シリーズなどボクシング映画に名作が多いのは周知の事実。

それはともかく、そんな裕次郎映画の時代状況を受けて、この映画には、相良の店に勤めている黒人との「あいの子」（ひょっとして、この言葉は今では差別用語で禁止……？）のビル（郷鏝治）が登場する。彼は「スカーレット」で仕事をしながらボクシングジムに通い、チャンピオンを夢みている青年。果たして彼の試合の行方は……？

そして、同じ店で働いている相良の船員時代の古くからの友人であった仙吉（高品格）の娘ヒロミ（太田雅子）との恋仲の進展は……？

君は太田雅子を知っているか……？

一世を風靡した『女囚さそり』シリーズ（72～73年）で一躍有名になったのが梶芽衣子。彼女は『修羅雪姫』シリーズ（73～74年）や上村一夫原作のテレビドラマ『同棲時代』（73年）でも有名で、団塊世代のおじさま族には知らない人はいないはず……。しかし、彼女が1965年に渡哲也らの同期生として日活に入社してきたこと、また彼女のデビュー当時の芸名が太田雅子（本名も同じ）であったことを知る人はほとんどいないはず……。そして、この『夜霧よ今夜も有難う』には、この太田雅子が相良への憧れと秋子への嫉妬心から、ちょっとした問題をおこしてしまうという可憐な役で登場……。

梶芽衣子ほど有名にならなかったものの、同じように1963年日活入社の女優、

西尾三枝子は『プレイガール』（70年）等で活躍したから、少しは知られているはず。しかしこの西尾三枝子が、あの三田明の大ヒット曲『美しい十代』を映画化した『美しい十代』（64年）で、田舎から東京に出てきた住み込みで働く可憐な「女店員」役としてデビューしたことを知っている人は少ないはず……？

俺の映画評論家としての年季は、筋金入りだということをあらためて再確認……？

あの歌この歌と、あの映画この映画

最近は、ヒット曲のタイトルをそのまま映画にしたものはめっきり少なくなった。この映画のように昔はやった「歌謡映画」なるものは、9・11総選挙の前に福島瑞穂党首や辻元清美候補が「社民党は絶滅品種になろうとしている。何とか絶滅の危機から救ってほしい」と叫んでいたように、ほとんど絶滅品種に近いもの……？

そうなったのは、娯楽が少なかったあの時代の日本では、紅白歌合戦が視聴率50%を誇っていたことからわかるように、歌謡曲は全国民的娯楽であり、大ヒット曲はすべての国民が知っているという大前提が存在していたため。もちろん、「歌は世に連れ、人に連れ」て必ず存在し、時代毎にヒット曲があるのだが、吉永小百合の『いつでも夢を』（63年）や石原裕次郎の『夜霧よ今夜も有難う』（67年）のように、歌のタイトルだけで映画館に客を呼べるなどということは、今やありえないこと……。

それは国民の娯楽が広がり、多様化したといえれば聞こえはいいが、要はテレビから垂れ流しのバラエティー全盛時代となり、国民がバカになったということとイコール……？

あの歌この歌が、あの映画この映画に結びついていた、あの時代がなつかしい……？ そんなことを考える私は、このホールに集合したみんなと同じようにもはや老境の域……？

2005(平成17)年9月24日記